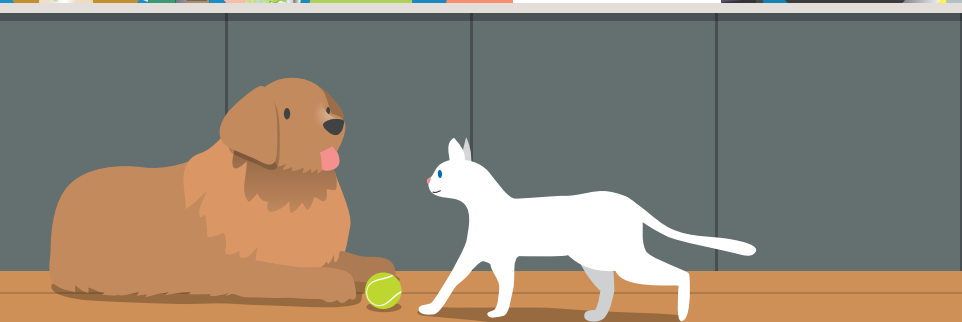


# 第13回

# 「いつもありがとう」

## 作文コンクール入賞作品集 2019

(選者) あさのあつこ / 森田正光 / 小島奈津子 / 山崎正毅 / 別府薫



## シナネンホールディングスグループ のこと知っているかな?

皆さんの身近なところで活躍しています!

「いつもありがとう」作文コンクールを共催しているシナネンホールディングスグループのこと、みなさんはどんな会社か知っていますか?

実は、みなさんの住まいや暮らしのなかで役立っていたり、社会を支えたりしています。その製品や事業について紹介します。

- 太陽光発電システム
- オリジナル住宅用品の販売 洗濯機用防水パンなど
- ハウスクリーニング
- ビルメンテナンス
- リフォーム
- 電気
- 家庭用エネルギー LPガス・都市ガス
- サービスステーション
- LPガス自動車用オートスタンド
- シエアサイクル
- システム事業 LPガス・電気の販売、配送、保安など
- LPガス・石油卸販売
- 自転車
- バイオマス燃料
- 省エネ提案
- メガソーラー
- 工場・業務用エネルギー
- 木くずリサイクル
- 抗菌剤
- 船舶用エネルギー

## 「いつもありがとう」作文コンクール主催企業

### シナネンホールディングスグループ

シナネンホールディングス ミライフ西日本 ミライフ 東日本  
日高都市ガス シナネン シナネンサイクル シナネンモビリティ+  
シナネンエコワーク シナネンゼオミック ミノス タカラビルメン  
インデス シナネンファシリティーズ シナネンブラジル

シナネンホールディングス株式会社

本社: 東京都港区三田三丁目5番27号 住友不動産三田ツインビル西館6階



ありがとう作文

検索

第13回「いつもありがとう」作文コンクール入賞作品集(2019) もくじ

先生方のお言葉……………3

あさのあつこ(作家)

森田 正光(氣象予報士)

小島 奈津子(フリーアナウンサー)

山崎 正毅(シナネンホールディングス株式会社)

別府 薫(朝日小学生新聞)

最優秀賞

びかびかのくつした

太田 陽翔……………4

シナネン賞

妹

直井 直裕……………6

ミライフ賞

「ねっ! おじいちゃん」

植木 涼太……………8

朝日小学生新聞賞

しあわせなおい

田中 悠翔……………10

優秀賞

〈低学年の部3編〉

はじめてみたあかいノート

服部 葵央……………12

わたしのパパはおじさんかんごし

堀内 海花……………14

こうちゃん

堀内 武虎……………16

〈高学年の部3編〉

家族色

お母さんと親子丼

「終わった私の反こう期」

三好 晴樹……………18  
藤田 清斗……………20  
田邊 璃奈……………22

団体賞(6団体)

【北海道】札幌市立西野第二小学校

【群馬県】太田市立生品小学校

【愛知県】扶桑町立柏森小学校

【愛知県】扶桑町立扶桑東小学校

【広島県】福山市立金江小学校

【宮崎県】宮崎市立大淀小学校

主催…朝日小学生新聞社

共催…シナネンホールディングスグループ

後援…文部科学省 朝日新聞社

●応募総数三八、二六八作品の中から選ばれました。

先生方のお言葉

あさのあつこ 「作家」

賞を選ぶというより、私自身が救われる気持ちになるコンクールです。子ども達の真つすぐさ、子どもを支える家族の姿に私が励まされます。五感を使った文章、表現もたくさん見つけました。「この表現いいな」と思うものにマルをつけていったところ、どの作品もマルだらけになりました! 子ども達の豊かな感性を感じることが出来て、幸せな時間を過ごさせてもらいました。

森田 正光 「氣象予報士」

作品の質が上がっているのでしよう。どの作品も高く評価できる点があり、審査会は苦勞しました。氣象予報士の立場としては災害が多かった年でしたが、困難なときほど家族の絆がためされる機会が増えるもの。でも、災害の苦勞を書いた作品はあまり見かけませんでした。家族のおかげで平和にすごせた家庭が多かったのかと思います。

小島 奈津子 「フリーアナウンサー」

どの学年も力をつけてきていると感じます。低学年でも「これだけのことを書けるのか」と感心しました。毎年審査するたびに、作文に登場する大人たちが発する名言にメモをとる私があります。「あつ、これを今度使わせてもらおう」と思う言葉が随所に散りばめられて

いる作品ばかり。子ども達や子どもを囲む保護者からたくさんのご意見を学ばせてもらいました。

山崎 正毅 「シナネンホールディングス株式会社」

今回初めて参加しましたが、作品を選ぶのは非常に難しいと感じました。特に今回は難しかったようで、本当に良い作品が集まっていたのだと思います。どの作品からも家庭の情景が伝わってきて、私の心に響くものばかりでした。子ども達の感謝の気持ちを伝えたいという思いが直球で届きました。自分自身が学ばされるような感覚もあり、素晴らしい作品を届けてくれた子ども達に感謝します。

別府 薫 「朝日小学生新聞」

最終審査に残った作品だけでなく、応募いただいたすべての子ども達がそれぞれの家族の物語や「ありがとう」を書いているのだと思います。そこに優秀はありませんし、どれも素晴らしいものです。それぞれの子が体験したことは各自にとって特別なことです。そんな全国の子ども達の体験を通じて、読んだ人の気持ちを温かくする特別な機会を提供できるコンクールだと思います。

(順不同敬称略)

## ぴかぴかのくつした

太田 陽翔

ぼくと兄ちゃんはやきゅうクラブに入っている。毎週土日の午後一時から六時まで練習するが、ぼくたちはいつもどろだらけになる。ぼくたちが練習から帰ると、お母さんは「おかえり！ はいはい、とにかくまっすぐお風呂場へ。」と言いながら、ぼくたちをでむかえてくれ、そのままお風呂場へ連れていく。Tシャツをぬぐうとすると「できるだけそつとね。」と言う。ベルトを外すと、「ゆかにおかないでかして。」と、ぼくたちからうけとる。ズボンやくつ下をぬぐうとすると「そつとね！ できるだけそつとぬいでここに入れて。」と「つ」つ言う。ぼくたちが全部ぬいでシャワーをしていると、「くつさー！ はながまがる！」というお母さんの声が聞こえてくる。

シャワーをし終えてつだい場に出ると、土でよごれたズボンやくつ下を、お母さんは青い石けんであらっていた。ぼくが「その青い石けん何？」ときくと「せんたくきだけじゃ土のよごれがおちないから、この石けんですすっておとすんだよ。」と教えてくれた。手洗いが終わるとせんたくきに入れ、今どはアップシューズとスパイクのなかじきをもってくる。「くつがとけないのがふしぎ。」ということばは、お母さんの口ぐせだ。

「穴が…。」ぼくたちのせんたく物をほしながらお母さんが小さな声で言った。見てみると、練習ズボンのひざの所が切れて穴があいていた。お母さんのことばをきいた兄ちゃんが「お母さんごめんね。」と言った。「え？ ああ、別にこんなのぬえばいいんだけど、けがするといけなかったなと思って。」と言った。ぼくもそれを見ていて「お母さん、いつもくさいくつ下を洗ってくれてありがとう。」と言った。お母さんは目を大きくしてわらいながら「ほんただよ！ くつ下がとけそうなくらいくさいんだから！」と言った。ぼくが「なんだよ。うるさいな。」と言うと「だって、こんなにくさくなるくらい、あせをかいて走っているんだな〜って思ったんだもん。」と言った。そしてぼくたちを見て「ズボンが切れるのも、くさいのも、それだけ二人ががんばっているってことでしょ？ もつとよごしてもいいし、くさくなくてもいいから、思いっきりやっておいで！」とえがおで言ってくれた。

ズボンが切れていても、くつやくつ下がくさくてきたなくても、お母さんはいつもきれいに洗ってくれる。そして、次にぼくがはいたりする時は、きれいになっていて、いいおいがするくつ下になっている。穴のあいたひざの所も、ちゃんとふさがっている。

ぼくと兄ちゃんが、大好きなやきゅうを思いきりできるのは、お母さんががんばってせんたくしてくれたら、ズボンをなおしてくれているからだわかった。これからもつとやきゅうをがんばりたいから、もつとよごしてくさくなくなってくるから、せんたくをよろしくね、お母さん。いつもありがとう。

## 評価のポイント

表現が難しいにおいについてしっかりと描写している。心がほっこりする作品。

## 妹

直井 直裕

「お姉ちゃんなんだから、がまんしなさい。」

まい日まい日、がまんする。妹のために、がまんする。楽しみにしていたおやつも、お気に入りの人形も、妹のためにがまんする。わたしは、妹がうらやましい。

夏休み、妹が高ねつを出した。その日は、お父さんといとこたちと、あそびにでかけるやくそくをしていた。

「あたまがいたい。いたい。」

ねこむ妹をおいて、わたしはお父さんと、出かけることにした。つらそうにねている妹を、おいて出かけるのはかわいそうだけど、お父さんとあそびに出かけたい気持ちの方が大きかった。

妹がいない時間、わたしはお父さんをひとりじめできた。妹がいないと、

「お姉ちゃんなんだからがまんしなさい。」

と、言われない。おいしいおやつも、人形も本も、全部わたしのもの。お父さんのだっこも、わたしだけのもの。わたしはうれしくて、うれしくて、家で待つ妹のことを、すっかりわすれていた。楽しくて、楽しくて、はしゃいで帰ると、妹が泣いて待っていた。

「あたまがいたくて泣いているの?」

わたしが聞いても、妹は何もこたえなかった。

何日かして、わたしも高ねつが出た。あたまがいたく、体もだるかった。妹はすっかり元気になっていった。

「どこか出かけるか?」

お父さんが妹に聞いた。わたしは、かなしくなった。お父さんとあそびに出かける妹が、うらやましかったから。あたまはわれそうにいたいし、あそびに出かける妹がうらやましいし、わたしはかなしくて、かなしくて、泣きそうだった。ひっそり泣くのをはがまんしていると、

「行かない! お姉ちゃんといる!」

妹の言葉に、わたしはおどろいた。わたしがお父さんとあそんでいた時、妹はどんな気持ちだっただろう。泣きながら待っていた妹。あの時、びょう気の妹をいばんに思っただけなら、なかつたことが、かなしくなった。

「お姉ちゃん、いつもありがとう。はやくげんきになってね。」

妹が、ならいたての下手な文字で書いた手紙と、お気に入りの人形を、まくら元にならべてくれた。

「ありがとう。」

「いつもありがとう、お姉ちゃん。」

がまん、がまんはいやだけど、もう少しだけ、妹が小学生になるまでは、妹のためにがまんしよう。だってわたしは、妹が大すきだから。

## 評価のポイント

妹の三言から姉への思いが伝わってくる。作者の心の成長がえがけている。

## 「ねっ！ おじいちゃん」

植木 涼太

「ねっ！ おじいちゃん」この言葉は、ぼくが祖父によく使う言葉です。何事にもうなずいて話を聞いて、味方になってくれる祖父がぼくは大好きです。どんな時でもぼくの力になってくれる祖父に感謝の気持ちこめて、ぼくと祖父のある出来事をお話したいと思います。

始まりは、木々の葉が色づき始めた秋の一日のこんな会話でした。

「おじいちゃん、ぼくの背がのびないんだよ。夏休みにたくさんの友達に追い抜かされたんだ。なんで伸びないのかな・・・。」

すると祖父は、

「大丈夫。時期が来たら必ず伸びるから。それまで牛乳を飲んだらいいよ。」  
と、笑って言いました。ぼくは内心、牛乳かあと思いました。飲んで伸びる気がしなかったのです。

そんな何でもない会話をしてから数日後、祖父が倒れました。祖父はすぐに入院になり、面会謝絶の札がはられて、子供のぼくは病室に入る事もゆるされませんでした。そんな中、家族がお見舞いに行くと必ずある物を持って帰ってくるようになりました。それは、祖父の食事に与えられる牛乳です。すぐにぼくのためだとわかりました。病室から出られない祖父が

どんな思いでと考えたら胸がいっぱいになりました。きつと自分に出来る最大限の事を考えたのでしよう。そんな日々が続く、あと数日で桜の開花が見れる頃、祖父は静かに旅立ちました。もちろん最後まで家族に牛乳をたくして。

ぼくは後悔しました。ずっと祖父と一緒にいられると思っていたので、ありがとうを伝え忘れてしまいました。ちゃんと目と目を見て、自分の口からありがとうを言える毎日があったのに、どうしてそれができなかつたのだらうと思いました。そして、ありがとうが言える相手がいる事がありがとうだったんだと気づきました。

こんな出来事から早くも数ヶ月がたちました。おじいちゃん、空の上で元気にしていますか？ 桜が咲いてから、ぼくの身長は6センチ伸びました。毎日、楽しく学校に通っています。おじいちゃんのお陰で、悩んでいた身長の話も解決しました。やっぱりおじいちゃんはおぼくの味方で大好きなおじいちゃんです。これからもずっとずっと見守っていてほしいから、さよならは言いません。

「おじいちゃんありがとう。」

これでいいよね。ねっ！ おじいちゃん。

## しあわせなにおい

田中 悠翔

ピピッ。ピピッ。

呼吸や心拍を測る機械の音が病室に響く。ぼくは音が鳴るたびに、振り返って、何度も波形を確認する。ベッドに横たわるおばあちゃんの鼻には、まだチューブがついていた。母は、おばあちゃんのほつぺたをなでながら、「お母さん、ありがとうね。おつかれさま。」震える声で話しかけていた。今まで見たこともない号泣の姿の母を見ると、また波形が動き出すことを願わずにはいられなかった。鼻の奥がぎゅーんと痛くなって涙がこぼれた。

長い休みには、広島のおばあちゃんの家に行くのが恒例になっていた。僕達の到着をとても楽しみにしてくれていて、

「よう来てくれた。ありがとうねえ。」

と、いつも玄関から飛び出してきて出迎えてくれた。テーブルには収穫したての野菜や、近くの海でとれたばかりの魚の料理が食べきれないぐらい並んだ。おじいちゃんが、

「こりや祭じゃ。普段とちごうて、えらいごつつおうじゃ。悠翔が来たからじゃのう。」と、にやにやしながら言った。

「そりや、悠翔が来るんじゃけん。張り切るわいね。ねえ、はやちゃん。」

と、ぼくを抱っこしたおばあちゃん。おだしのいいにおいがした。つい最近のことなのに、とてもとても昔のことのように思える。

おばあちゃんの病気はみるみる悪化していった。歩くことも困難になり、食べることも全く楽しめなくなっていた。あのふつくらした腕がどんどん細くなっていく。おばあちゃんが食べるのができた日は、

「わあ。今日は食べてくれた。ありがとう。」家族みんながほめた。少しでも元気になってほしかったからだと思う。

「悠翔が赤ちゃんの時、あんまりごはんを食べんかったけん、食べてくれたらうれしかったけど、逆の立場になってしまったなあ…。」

少しさみしそうにおばあちゃんはつぶやいた。

ベッドから起き上がることができなくなったおばあちゃんのそばにいたくて、となりにころんと横になった。二人でテレビを見た。

「はやちゃんは優しいね。ありがとうね。」

手の平で頭をなでてくれた。ぼくは泣きそうになったのがばれなくなくて、おばあちゃんの懐に顔をうずめた。前はおだしのおいがしていたけれど、もうしなかった。それでもぼくは胸いっぱいおばあちゃんのおいを吸い込んだ。やっぱりいいにおい。

「おばあちゃん、ありがとう。大好きだよ。」

二人きりで話したのはこれが最後だ。

おばあちゃんのまわりにはいつも、「ありがとう」がいっぱいだった。ありがたいと思う気持ちの大切さを、言葉でも態度でも教えてもらった。「ありがとう」には、「しあわせ」な気持ちがたくさん入っていると思う。ぼくはそれをしっかりと引き継いで生きていきたい。

## 評価のポイント

祖母がどんな人なのかがよく分かる。セリフに血肉が通っていて心が揺さぶられる。

## はじめてみたあかいノート

服部 葵央はっとり 葵央

わたしには、1さいになったばかりのいもうとがいます。

「どうしてないているの？」

と、おかあさんにきくと、

「おなかがすいているんだよ。」とか、

「さっきうんちをしたからねむいんだよ。」

と、すぐにこたえて、そのとおりになります。おかあさんはまほうつかいみたいです。

「ないているだけなのに、どうしてそんなにきもちがわかるの？」

と、きくと、あかいノートを2さつもってきてくれました。

1ページあけるとわたしのなまえがかいてあって、2ページめからはミルクをのんだりようやねているじかん、おむつをかえたじかんがかいてありました。

そして、1にち1にち「おふろのじかんにおおなき」とか「はじめて3にんでとおくにでかけた。」とかみじかいぶんしょうがかいてありました。

ページをどんどんめくって1さつめのさいごのほうになると、「おかゆ3さじ」や「は

じめてのたまご」などのメニューがでてきました。

わたしは196にちめに、はじめてのほうれんそうをたべたみたいです。

おかあさんはノートをみながら、

「きいちゃんのはじめてのあかちゃんだったから、たくさんやんですこしずつママをすることに慣れていったのよ。だからいまは2かいめだからなれているんだよ。」

と、いいました。

「なんねんママをしているの？」

と、きくと、

「きいちゃんが6さいだから、ママになって6ねん。」

と、いいました。

わたしがうまれたから、おかあさんもうまれたんだなとおもいました。

そして、いまのわたしがすききらいがすくないのは、あかちゃんのころからいろいろなごはんをつくってもらっていたからなのかなとおもいました。

「チーズはたべさせてなかったの？」

と、おかあさんにきくと、ふふつとわらいながらうなずいていました。

わたしは、いまチーズがとくいではありません。いつもごはんをつくってくれてあげがとう。

## わたしのパパはおじさんかんごし

堀内 海花

わたしのパパはかんごしです。わたしが生まれた時に、体が小さく、こきゅうが上手に出きなくてNICUでお世話になりました。ほいくきに入っているわたしを見て、この子のために、今自分が人のために出来るのは、かんごしになることと思って、37才の時に学校に入ったそうです。その日からママがパパのようにおしごとをして、パパがママのかわりにごはんを作るようになりました。パパはごはんがおわると、毎日べん強をして20才も年のちがうおにいさんやおねえさんたちといっしょにがんばっていました。あそんでほしいと思っただけで、ママに「上のへやに行こうね。」と言われてしまう。

ようち園のうんどう会に、じっしゅうで来られなかったので、お友だちのパパと親子リレーに出ました。一位だったけれどちよっとかなしい気もちになりました。次の年のリレーには、パパと出て三位だったけど、すごくうれしかったです。

ほかのお家とちがうことがいやで、小さかったわたしはみんなと同じがいいなと思っています。

ママに「なんでほかのお家のパパみたいにあそんでくれないの」と聞いたことがある。

ママは、「パパはたくさんおべん強をしてきつとみいちゃんをたすけてくれるようになるよ。」と言っていた。今あそんでほしいのになど思っていた。三年間はとても長かった。そんな時にテレビでびょういんのドラマを見た。ドラマの中のかんごしさんはとてもよかったよ。よかった。いつものパパは、かっこよくないけれど、人のためにがんばるしごとだとよくわかった。すごい。

パパはかんごしのしかくがとれた時ママとわたしに「三年間ありがとう。」と言ってくれた。パパは、かんごしになってから、いろいろな所につれて行って行ってくれる。おしごとはとてもたいへんそうだけれど、「つかれたー。」と言いながらいっしょにお風呂に入ってくれて、話を聞いてくれる。あの時いやだなと思っていたことを少しはすかしお思った。今はかんごしのパパはわたしのじまんです。ママが言っていたように、わたしやかんじやさんのためにがんばっている。あんなに小さかったわたしも、今ではクラスで後から数えたほうが早くなつたよ。パパいつもありがとう。



## こうちゃん

堀内 武虎

こうちゃん。ぼくのお父さんのあだ名。ぼくが三年生になった時、ぼくのお父さんになったんだ。

ぼくの家は、お母さんと五人兄弟の六人だった。ある日、こうちゃんが家に来た。ずっと玄関に立っていて、なかなか家に入ってこないから、みんなで大笑いした。これが、こうちゃんとの出会い。

「起きろっ。遊びに行くぞ!!」

日曜日の目覚まし時計のこうちゃんのかげ声。こうちゃんは一番に起きて、みんなの水筒を用意している。そして、いろんな所へ連れてってくれる。ぼくは、日曜日が大好きだ。

ゴーカートに乗ったとき、ものすごいスピードと、地ひびきのような音とともに、「ひゃっほーい!!」つて、ぼくたちを追いぬいていった。「もう一回いくか!!」つて、そんなに乘った目が回っちゃうよ。こうちゃんは、ぼくたち五人と、いつも楽しそうに遊ぶんだ。たくさん遊んで家に帰って、一番下の弟と昼ねをする。横になって、たった十秒で大きいびきをかきはじめる。弟が眠れないよ、こうちゃん。

そんなこうちゃんが、一度だけ怒ったことがある。ずっと習いたかったサッカーを、ずる休みしないという約束で、習えることになった。でもその日はゲームをやりたくて、ずる休みをした。仕事から帰ってきたこうちゃんは、毎回サッカーのことを聞いてくる。ぼくはうそをつけなくて、正直に言ったんだ。そしたら

「約束をかんたんにやぶるな。自分で決めたことは、やり通してみろ。」と、真けんな目で言われたんだ。こんな目を見るのは初めてで、大きな粒の涙が、ポロポロと、ほっぺを流れた。ごめんなさいって、本当に反省して、涙が止まらなかった。

こうちゃんは、仕事から帰ってくると汗くさい。だから、すぐにお風呂に入るんだ。ぼくたちも参入する。お風呂がプールになったみたいに楽しいから。さわぎすぎて、たまにお母さんに、しかられる。

こうちゃんって、すごい。こんなに汗かいて、一生けん命働いて、ぼくたち五人のお父さんになってくれた。お母さんを助けてくれた。「将来が楽しみ」つて、いつも楽しそうなこうちゃん。ぼくが大きくなったら、サッカーせん手になって、スタジアムの特とう席に招待してあげるよ。こうちゃん、きつと泣いて喜ぶと思うんだ。

今日からぼくは、「こうちゃん」じゃなく「お父さん」つて呼んでみようと思う。だって、世界でたった一人の、ぼくたちのお父さんだから。笑っているお父さんも、いびきのすごいお父さんも、叱ってくれたお父さんも、全部大切なお父さんです。

お父さん、いつもありがとう。

## 家族色

## 三好 晴樹

ぼくの家族は、みんないるんないところがあります。それを絵の具で表すと、全部ちがう色になります。

ぼくのママは青です。ママは家事や仕事をしてくれます。ほかに習い事の送りむかえもしてくれれます。ママはやさしくて静かな海の青のように、ぼくの事を思ってくれています。でもぼくが悪い事をおこったときは、あらしの時の海のように黒っぽい青になります。おこられている時はとてもこわいけど、ぼくの事を考えてくれておこっているのがまんです。だから、ぼくは少しでもおこられる回数へるようになんばります。

ぼくのパパはオレンジです。パパはぼくの勉強を見たり、分からないところを分かるように教えてくれたりもします。休みの日はカブト虫をつかまえに行ったり、いっしょに遊んでくれたりします。家でもよくじょう談を言っています。だからパパの明るいせいかくは、太陽のようなオレンジの明るさがびったりです。

みいちゃんはぼくのお姉ちゃんで色は赤です。みいちゃんは、ぼくの勉強の丸つけをしてくれたり、後の事を考えて真げんに注意してくれたりします。他にいっしょに遊んでくれたり、やる気があるからもある赤です。

ぼくのじいちゃんは茶色です。それはぼくが食べる野菜やお米や果物をつくってくれて、日やけをしているからです。ぼくのじいちゃんはおいしい物をたくさん作ってくれます。いつものごはんには必ずじいちゃんがつくった物が入っています。

ぼくのばあちゃんはピンクです。いつもぼくがばあちゃんちに行くと、「はるくん。」と言って喜んでくれます。そんなばあちゃんはみんなにやさしく、おこる事がほとんどないから、やさしいピンクがよく合います。

ぼくは、そのほかにたくさんの人に助けてもらいながら生きています。ぼくの周りにはいろんな色があふれています。ぼくが画用紙だしたら、みんなのいろんな色できれいな絵がかけそうです。

これからもみんなにいつも「ありがとう」の気持ちわすれず、少しずついろんな色をつけてもらいながら、ぼくがrippな絵になるようにがんばっていきます。

## お母さんと親子丼

藤田 清斗

「ただいま。おそくなつてごめんね。」

ほくのお母さんは、いつもこう言いながら帰って来ます。仕事をしていておそくなつていただけだから、あやまらなくてもいいのに、おなかをすかせて待っているほくたちにいつもあやまります。

いつもおそく帰ってくるお母さんだけど、ちゃんとご飯を作ってくれます。ほくは、お母さんが作ってくれる料理の中で親子丼が一番好きです。甘い玉子と玉ねぎが、ふわふわしゃくしゃくとしていてからです。「親子」っていう名前もいいです。毎日親子丼でもいいのに、お母さんは、

「そんな簡単にできるものでいいの？」

と言って作ってくれません。ほくのたん生日のときに、親子丼がいいと言ったときは、お母さんは笑いながらいつもより多めに作ってくれて、いっぱい食べられました。

お母さんが早く帰ってきたとき、ほくはお母さんと料理を作ります。ほくとお母さんで料理を作るときは、だいたい玉子スープを作ります。ほくは玉子スープが好きだし、それに玉

子をわるのが得意だからです。ほくの家では、玉子スープに玉ねぎを入れます。その玉ねぎを切るときほくは目が痛くなります。そのとき、お母さんがいっしょに切ってくれます。

ほくは、親子丼や玉子スープは、お母さんに似ていると思います。温かくて、甘くて、ふわふわしていて、毎日いっしょにいてもあきないからです。お母さんの親子丼を食べていると、心がほっこりしてきて、お母さんの子どもに生まれてきてよかったなと思います。お母さんに、

「親子丼おいしいよ。ありがとう。」

と言うと、お母さんはにっこり笑ってくれます。ほくは、大人になつても親子丼が大好きだと思えます。それは、お母さんのことが大好きだからです。だから、その気持ちを「ありがとう」という言葉にこめて、お母さんに伝えていきたいです。

お母さん、いつもありがとう。(大好きだよ。)

## 「終わった私の反こう期」

田邊 璃奈

「ごめんね。夏休みの計画が立てられんね。」

乳ガン検しんをうけた母は再検さになった。近くの大きな病院に再検さをうけにいった日の母の一言に私は泣きそうになった。

再検さをしたら、ガンかどうか分からないものがあつたらしい。その分からないものを注器でとって検さに出したそう。結果がでるのは十日後。

「きつと大丈夫。」

と父。私も、

「お母さんならガンがにげるばい。」

強がってはみたけれど、やつぱり泣きそうだった。

その日から、母は食よくがなくなり、けいたいを見るのがふえた。きつと、乳ガンについて調べているんだ。何事もなかったかのように必死に笑ったりしているけれど、やつぱりいつもとちがう。

今まで生きてきて一番長い十日間だ。

ある日、父は仕事から、私は市のイベントから帰宅。

「きのう病院から結果を聞きに来て下さいって電話あつたから今日行ってきた。」  
と母。父も私もパニック。

「何で言わんかったん？ 一緒について行くち言つたやん。」

と父。聞きたいけれど聞けない一言。

「どうやった？」

口をひらいたのは父だった。

「大丈夫やった。ガンじゃないって。」

全身の力がぬけるって、これかと思いました。人間って、本当にうれしい時はすぐに声が出ないことを知った。

「明日結果をききに行くち言つたら、亮さんは仕事を手につかんし璃奈はせっかくのイベントを楽しめんくなるやろうち思つたけん。ごめんね。一人で行つて。」

父もすごく安心していた。父と母が話している時、母のうでのアザときずに気付いた。指のあとだ。とくに左うではひどい。きつと、あの広い待ち合い室で検さ結果を待っている間、不安で不安でうでをつかんだんだと思つた。いつもきれいにぬっているネイルは先がはげている。

そのアザを見たしゅん間、私の短い反こう期は終わった。どうでもいい事ですぐ反こうしていた私。いやな事があるとすぐ顔に出す私。ごめんね。と何度も思つた。そして元気でしてくれたことに感しやした。

「これだれ？ 使つたら元にもどしてよ。」

今日も母のどなり声…いや元気な声が家にひびいている。父と顔を見合わせ、

「幸せだね。」

「だね。」

と笑つた。